

2022年1月23日 主日礼拝

説教題「忘」第一コリント 11 章 23～26 節

主任牧師 加藤 誠

「これは、あなたがたのためのわたしのからだである。わたしの記念としてこのように行いなさい」(第一コリント 11 章 24 節)

阪神淡路大震災から 27 年目の今年の 1 月 17 日。夜明け前の暗闇に包まれた神戸市東遊園地には三千本余りの灯籠によって「忘 1・17」の文字が浮かんでいました。「忘」という漢字は公募で選ばれたもので、「忘れてはいけない」との思いだけでなく、「忘れてしまう」「忘れてしまいたい」などの声も込められたとのこと。

あれだけの大地震災が起こり多くの犠牲者を出したことを「忘れてはいけない」し、なかったかのように風化させてはいけない。けれども震災で愛する家族を亡くした方々にとっては、愛する家族のことは「決して忘れない」けれど、胸を引き裂かれる痛みから解放され「忘れてしまいたい」出来事であるということ。そのような場合には「忘れられる」ことが救いになる。「忘れてはいけない」けれど「忘れない」。

「忘」という一つの漢字の中に、相反する思いが込められていることに「なるほどな」と思いながら、しばし考えさせられました。だとするなら「忘れてはいけない」という時に、大切なことは「何を」忘れずに記憶するか。その「何を」を考え続けていくことではないでしょうか。

聖書を開くと「忘れてはいけないこと」を繰り返し想起し続けるために、人びとは石を積んで記念碑を建てたり、儀式として次の世代にも伝える工夫をしています。

聖書は「何を」忘れずに繰り返し心に刻み、記憶し続けるように語っているかという、それは「神さまの大きな憐れみと慈しみ」です。この世界にあらわされ、一人ひとりの人生にあらわされた「神さまの大きな憐れみと慈しみ」。それを繰り返し心に刻み、私たちの心の真ん中に置き続けるように、聖書は招いています。

例えば、ヤコブは兄エサウの殺意から逃れるために家を出て、野宿をした時に、「わたしはどんな時もあなたと共に居て、あなたを守り、再びこの地に連れ帰る。わたしはあなたを決して見捨てない」という神さまの語りかけを聴いて、その場所を「ベテル」(神の家)と名付けて、石を積み上げ記念碑を建てます(創世記 28 章)。神さまの憐れみと励ましを「忘れまい」。ヤコブはその後、約三十年の間、叔父ラバンのもとで大変な苦勞をするわけですが、それでも、「ベテル」で出会った神さまの憐れみと励ましにつながり続けることで、その不遇に耐える力をもらっていきます。そして約三十年後、ヤコブは神さまの約束のとおりベテルに戻り、礼拝をささげ、兄エサウとの和解にも導かれたのでした。怒りや憎しみ、あるいはコンプレックスなど、自分の歪んだ感情が私たちの心の真ん中で支配する時、私たちの行動は周りに悲劇を生み出していきますが、私たちが神さまの大きな憐れみと励ましの約束を心の真ん中で大切に握りしめていく時、私たちは周囲からの不当な仕打ちに対しても、自分の感情的な怒りで対抗するのではなく、神さまから与えられる知恵や誠実

をもって向かい合う力をいただくことができるのです。

またイスラエルの人々はかつてエジプトで奴隷として働かされていた時に、神さまから救いだされてカナンの地に戻って来ることができました。そのカナンは豊かな緑に覆われた土地であり、家を建てて住み、農作物の実りを享受することができたわけですが、そのときに神さまから厳しく釘を刺されています。あなたたちはなぜ豊かなカナンの土地に住むことができるようになったのか。間違っても自分たちの力で可能になったかのように勘違いするな。奴隷の家から導き出された主を決して忘れないよう注意しなさいと。そして「聞け、イスラエルよ。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」という御言葉を心に刻み、子どもたちに繰り返し教えなさいと語られます（申命記 6 章）。主なる神さまの憐れみの救いの業を忘れる時、私たちは自分に与えられている「自由」は「自分がしたいことを何でもしてよい自由」なのだ勘違いを始めてしまう。そうではなく、私たちに与えられている「自由」は「神さまにつながり、隣り人を愛していくための自由」であること。その一番大切なことを「忘れることがないように」と聖書は私たちに釘を刺しているのです。

また新約聖書において「忘れてはならない」と語られている代表的なものは「主の晩餐式」です。パンと杯を分かち合い、一人ひとりがイエス・キリストの十字架を「繰り返し想起するように」、私たちは招かれています。25 節「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である」とありますが、この「新しい契約」とは何か。「旧い契約」とは、イスラエルの人々がエジプトを脱出する時に「羊の血」によって彼らだけが大きな災いから救い出されたことに象徴されるように「イスラエル民族だけを救う契約」でした。けれども主イエスはイスラエル民族だけでなく「すべての民」を救う神さまの愛をあらわされました。これを「新しい契約」と言います。特に主イエスは、人間の歪んだ愛、罪によって深く傷つけられて痛んでいる一人ひとり、例えば「忘れたいののに忘れられない」苦しみに痛み続けている一人ひとりを神さまの愛と安らぎの中に連れ戻すために来てくださいました。同時に主イエスは、隣人を愛することができずに傷つけてしまっている者たちが、その歪んだ自己中心の愛の間違いに気づいて神さまの愛に立ち帰るようと十字架の上で執り成し祈ってくださった方でもありました。つまり、人間の罪によって痛んでいる一人ひとりを救うと同時に、隣人を痛み、悲しませている一人ひとりが、神さまのもとに立ち帰って「新しい人」に創りなおされていく、そういう「新しい契約」に私たちを招き入れてくださったのです。

主なる神や家族、周囲の隣人から示された厚意や赦し、あるいは過去の失敗や罪など。それぞれの人生において「忘れてはいけないこと」を大切に心に刻む者でありたいと思います。十字架の主の赦しゆえに罪悪感に捕らわれ続ける必要はないにしても、私たちが神の愛と正しさに心と体をしっかり向けて歩いていくために「忘れずに記憶し続けなさい。そして、主なる神さまの愛につながり続けなさい」と私たちに招いている聖書の御言葉に心と体を向けていきましょう。